

2021. 4. 14

ウェーブ

時評



田中 均

たなか・ひとし 69年京大法学部卒。外務省経済局長、アジア大洋州局長、外務審議官を経て(株)日本総研国際戦略研究所理事長、(公財)日本国際交流センターシニア・フェロー。

ツイッターを始めて

ツイッターを始めて1カ月になうようになった。

「発信の場がいろいろあるのになぜ? 心ないコメントが殺到して炎上するよ」と心配してくれる友人たちが多かったように思う。ただ使ってみて理由があった。

私はツイッター、フェイスブック、インスタグラムなどのSNSが人々、特に若い世代のコミュニケーションの道具として多用されていることは承知していたが、自分には荷が重い、友人との交流にはメールとLINEさえあれば十分と思っていた。しかし、ツイッターなどで発信されたことが、世論をリードする上で大きな影響力を持っており、無視できないと思

さらに、なぜトランプ前大統領のような公職経験がない人が大統領になり、昨年の選挙でもバイデン大統領に拮抗することができたのかは大きな謎であったが、その謎を解くカギはツイッターにあるのではないかと思うようになり、自分自身で使ってみる必要があると考えるに至った。

使ってみてわかったことがいろいろある。もちろんツイッターを使う目的は様々あるだろうし、自分で発信をするより情報を集める道具と考える人も多い。私は情報収集より発信をして、それが世の中の多くの人にどう受け止められ

るかを目的が大きい。それもツイッターの場合リアルタイムでそれを感じられる。世論形成に影響を与えるためにはツイートがどれだけ「拡散」されるかにかかると、多くの人が「フォロワー」となり、私が発信したツイートを読んでくれることが必須だ。同時に、「インフルエンサー」と呼ばれる多数のフォロワーを持つ人が私のツイートを「リツイート」してくれるとなお良い。

芸能人や政治家、あるいはテレビ番組に頻繁に登場する有名人は別として、私のような外交官出身知識人に過ぎない人物のツイート

を拡散してくれるフォロワーを獲得するのはなかなか難しい。幸いこの1カ月で8千人近い人々が

フォロワーとして登録してくれているが、私にとって重要なのは、私の率直な意見に対してどれだけの人が「いいね」を返信してくれるか、どういう具体的コメントを寄せてくれるか、ということだ。

これまでの最大のヒットは官僚と政治の関係をツイートした時点で、42万人近くの人々が読み、6千人を超える人々が「いいね」を返信してくれた。他方、最も考えさせられたのは韓国についてツイートした時だ。「韓国からの新任大使に外務大臣は早急に会われるべきで対話による外交の姿に戻すべき」と論じたのに対し、およそ800人が「いいね」と発信してくれ

たが、およそ300人からは消極的コメントが返ってきた。反韓国感情が強いということに驚いたのではなく、合理的議論にくみしてくれる人の多さに私は安心した。

トランプ前大統領は自分のツイートに関して緻密な分析をしているのだろう。そのうえで広報戦略を考え実行していったのではない。主要新聞やテレビの評価よりも重視し、世論を作るというより、多くの人々の感情に訴えることで支持を増やすためツイートを活用したのではない。人々の感情をあり、人々が持つフラストレーションを発散させる道具としてツイッターは効果が大きい。しかし本当に必要なことは感情に走り、ちな世相に乗じることではなく、合理性を持った世論を作ることではないか。